



# 心の歌を奏でて

---

—序章— ②

---

芳田尚哉

---

翌早朝——というか、眠ったのも深夜だったので数時間後だ。俺はじいさんに叩き起こされた。まさに文字通り。

「なんだよじいさん、さっき眠ったばかりなんだけど……」

と、愚痴を言うと、竹刀で叩かれ一気に目が覚めた。

ったく……眠いしまだ身体が痛いしで最悪だ。

「特訓だと言ってあったろうが！ さっさと起きて準備じゃ！」

う～ん……寝起きに悪い声だ。

ぐずぐずしていても叩かれるだけなのは経験上わかっているのに、もたもたしながらも何故か用意されていた稽古着に着替える。稽古着に袖を通すと、不思議と気が引き締まる。なんだろうね、この感じ。

ちょっとくらい休ませてくれても……と一瞬そんな考えがよぎるが、昨日、自分たちがしでかしてしまった事を考えるとそうも言ってられない。それが不可抗力もあるとはしても、宝探しをしようとしたのは俺たちだし。

それにしても、早朝だからだろうか静かだ。

あんな化け物がいるんだし、もうちょっと騒々しいかと思っていたが、本当はなにもなかったんじゃないかって思えるくらい静かだ。

「おはようございます」

「ほれ」

挨拶をして表に出ると、すぐなにかを投げられた。

「え、おととと……」

落としそうになりながらもなんとか受け取る。が——ずしりと重い。油断しまくりで力が入ってなかったので肩が抜けそうになった。

「なんだよ、これ……」

ぼやきながらそれを見ると、どうやら木刀のようだ。でも……それにしても重い。

「今からお前には、それを使いこなせるようになってもらおう——」

いつもとはどこか違う厳しい声だった。

いつもも厳しいんだけどなにかが違う。

「——ただし、時間はあまりない。できればすぐにでも使いこなせ」

それは無茶だ。

ふざけるな……と言い返したいところだが、じいさんの目が有無を言わせない。なんだ、その目は……。冗談なんか言える雰囲気じゃない。いつも稽古はもちろん真剣だったけど、そんなの比じゃない。

「あ、ああ。わかった」

そう答えるのが精一杯だった。

「わかったら、さっさと素振りを始めんか！」

と、竹刀で叩かれ素振りを始めた……………のだが、いかんせん重い。本当に木刀か？ しっかりと踏ん張らないと身体が持っていかれそうだ。これじゃまるで、この木刀に振られているようじゃないか。

俺だってこれでも昔からじいさんにしごかれてきたんだ。そこいらの剣道部員よりは竹刀の扱いは上手い自信はある。その俺がこんなちょっと重いくらいの木刀に弄ばれてたまるか。絶対、使いこなしてやる。

「邪念が多い！」

容赦ないじいさんの竹刀が飛んできた。

「ってえ〜」

「お前はなにを考えて振っておる。昔わしが教えた事をなにも憶えておらんのか」

昔じいさんに教えられた事……………？

……………なるほど。

「すまん、じいさん。あまりに久しぶりなんで忘れてたよ」

パシャン！ と竹刀が飛んてくる。

「その口の利き方はなんだ。それが師匠に対するものか」

……………ったく。

「申し訳ありませんでした。思い出させていただきありがとうございます」

木刀を脇に持ち、礼をする。

じいさんは、よし、と頷いて俺をじっと見る。

ホント、サンキュな、じいさん。すっかり忘れていた事を思い出させてもらった。それに、ちょっと冷静になれたかな。

ゆっくりと目を閉じる。

木刀を握りなおす。そして正面に構える。

あとはイメージする。手の延長となって自分の身体の一部となった木刀を、思うままの軌道を描く姿を。

そして、そのイメージ通りに腕を動かす……のだが、やはり重さに身体をもっていかれてしまう。あいにくと達人というわけではないので、道具が変わってしまうと慣れるまでは一苦労だ。

「まだまだじゃが、なかなか見込みはある。さすが、わしが仕込んだだけの事はあるな」

と、じいさんはそれを見てなんだか喜んでいる。遠回しでわかりにくいけど、どうやら褒めてくれているらしい。滅多に褒めないじいさんがそんな事を言うもんだから、なんだかすぐったい。しかし、ここで気を緩めるわけにはいかない。むしろ引き締めないと。少しでも早くこの木刀に慣れないといけないんだから。

というわけで日が昇り、いわゆる一般的に朝といわれる時間までずっと素振りを続けた。

最初こそ重さに負けていたが、終わる頃にはだいぶ慣れて、そこそこ使えるようになっていた。

朝食の時間、じいさんは門番(ポーディスト)を探すべきだと言い出した。あの巻物にある門番(ポーディスト)を探して蘇らせ、再び蟲(ベステート)を封印するしかないだろうという事だ。それは俺も同意するが.....その門番(ポーディスト)とやらはどこにいるってんだ？

あの地図を一応広げてみるものの、残念ながらそれらしいものは描かれていない。

村の地図と照らし合わせてもなにも.....なさそうだ。

白西山の山頂と、トカキサマとやらの場所と唐漣(からすき)池だろ。それ以外はその蟲(ベステート)が封印されていた `畢、 が書かれているだけだ。

村の側一たたとえばこの家の場所なんかは全く地図には.....ん？ なんだろう？ 山頂がここで、この家がここで.....トカキサマと唐漣池の場所を線で結ぶと、だいたいだが、ここは山頂の線対称の位置にある。これって偶然.....か？ でも、偶然だとしてもなにも手掛かりがない今は、これにすぎるしかなさそうだ。

「なあ、キヨカ、これなんだけどさ.....」

と、俺が発見した事を説明する。一緒に聞いていたじいさんも、しきりに頷いている。

地理的に偶然の配置であったとしても、俺のばあちゃんがそれを利用しないわけではない、というのがじいさんの考えだ。

ただの蟲(ベステート)が封印された場所だけのはずがないと思っているようだ。

もしそうなら、この `畢、 の線対称の場所こそ門番(ポーディスト)が封印されている場所だという事になる。

しかし.....そこは普通の場所だ。なにもない。強いて言えば、この家からばあちゃんの家に向かう道の途中だ。

やっぱり違ったか.....。そうそう上手くいくわけないよな。

振り出しか.....。

「まあ、すぐにはわからんじゃろうな。とにかく、今日は二人で村中を歩いて、それらしい場所を探すんじゃな」

そう言い残すと、じいさんはどこかへ出掛けていった。

「そうそう、お前はあの刀を常に持ち歩くんじゃぞ」

と、付け加えて。

どうして門番(ポーディスト)探しにあの木刀が必要なんだ？ 重さに慣れろとかそういう事か？ 確かに手に馴染んでいた方がいいとは思うけどな。とにかく、逆らったら後が怖いし、別にそのくらい構わないさ。

「じゃあ、今日はトールちゃんとおさんぽデートだね」

「デートじゃねえ」

即答で返してやった。

「.....照れ屋さんめ」

どこまでも前向きというか、めげないというか、自分勝手なヤツだな、おい。

まあ、反論しようがなにしようが無駄だろうからそれでいい。

なんか認めるのは癪だけだ。

***(C)2012 STUDIO SAIX All Rights Reserved.***

というわけで、準備という準備はなく村の地図を手に楽しくルンルンと歩くキヨカ。スキップしたり鼻歌まで……。しかも「おさんぽデート♪ おさんぽデート♪ るんるんデート♪ 楽しいデート♪ るんるん♪、とか即興の歌を唄っている。だから、デートじゃないっての。

救いなのは他に誰もいない事だろうか。こんなの誰かに聞かれたら俺が恥ずかしい。人が少ない村でよかった。こいつなら普通に街中でもしそうだから怖い。

「なあ、どこから探す？」

「そんなの、行き当たりばったりでしょ」

「……………」

なんだ、それ。絶句だね。

行き当たりばったり？ 計画性という言葉はキヨカの辞書にはないというのか？ いくらなんでもそれはないだろ。

「じゃあ、トールちゃんはなにか考えがあるの？」

「……………」

そう言われるとつらいな。確かに俺も無策だ。

「ごめんなさい」

猛省。

「わかればよし。――というわけで、おさんぽデートだよ☆」

もう、なにも言うまい。

とぼとぼとあてのないお散歩をするわけか。それにしても、この木刀だが……意外と疲れるな。軽めのダンベルを持っている感じだな。地味に鍛えられているような気がする。

特に会話もなく二人並んで歩く。手を繋ごうと言われたが、さすがにそれは断固拒否した。会話がなくなったのもそれからだ。不貞腐れているらしい。なんか疲れるな。

個人的な感覚ではかなり重い空気だった。

「さて、到着！」

と、突然キヨカが底抜けに明るい声で言った。

到着？ 目的地なんてないのにどこに着くというのだろうか。まったく、その思考にはついていけない。

「で、どこに着いたんだ？」

そう訊くと、キヨカは村の地図を覗き込んで、

「え〜っと、ここらへん」

と、ある一点を指した。そこは、俺が朝食の席で言った「畢、の線対称の場所だった。

「キヨカ、お前……」

「トールちゃんがなにか思ったなら、まずは確かめないとね」

うわっ、なんかじーんときた。感動しちゃってるよ。なんか胸が熱いよ。こんな事なら、手くらい繋いでやってもよかったと思えちゃうよ。

「でも……ここってホントになにもないよね」

キヨカはくるりと回って周囲を見回す。

確かに道の脇には畑や田んぼがあるだけだ。まさか、このどこかに埋まってるとかないよな。掘り返すなんて無理だぞ。体力的にもだが、他人の畑を……作物を育てているのに掘り返すなんて倫理的にも無理だ。

「どこかになんかそれらしいものないか……………な」

と、そんなキヨカの視線の先には――

「あれは？」

そこには、あの祠(ほこら)があった。

これほど怪しいものはないだろう。いかにもって感じだ。なにを祀(まつ)っているのかよくわからない祠。

「というわけで、いってみよー」

と、キヨカは嬉々として走り出した。

「おい、ちょっと待って……」

「ほら、これ」

と、全速力で走ってくれたお蔭でゼイゼイいってる俺を無視して一人で進めてやがる。

「なんだよ……」

朝からしごかれて、今日の体力は使い果たしちゃったのかな……もっと体力つけないとまずいかも。これは、今回をいい機会だと思って剣道でも始めようかな……。

「ほれ、これを見る」

と、無理矢理ぐいと首を動かされた。

「痛い痛い！」

「うるさい！」

一喝された。

なんだろう、この仕打ちは。つうか、遠野家の人間は他人への接し方がおかしいんじゃないだろうか。あのじいさんの教育がおかしいんじゃないだろうか。まあ、あれだしな……はあ〜。

「ほら、ここっ！」

と、ご立腹気味のキヨカは、祠をズビシと指した。

「なんだよ……………これって……………」

一瞬、言葉を忘れた。

祠には、八角形が描かれていて、それぞれ対角線が引かれている。

これって……………。

頼りない記憶を辿っていく。

……………そうだ。あそこだ。あの石棺の蓋に彫られていた模様だ。

っていうか、ばあちゃんの家に行く時もこれを見たはずだよな。だったら、あの石棺を見た時にこの模様を思い出せよな、俺。なんて莫迦なんだろう。

「さすがだね☆」

と、キヨカは本当に嬉しそうに笑っていた。

「で、その門番(ポーディスト)とやらがここに封印されているとして、どうやって蘇らせるんだ？」

「……………」

俺の質問にキヨカは黙ってしまった。

同時に重い空気が辺りを支配する。

あれ？ これって言っちゃいけなかつたりした？ でも、一番大事だろ？

「空気読め」

ぼそりと言われた。怖い。

「せっかく喜びに浸っていたのに……ぶち壊しちゃって……」

「いや、でもな。それって大事だろ？ どうすればいいのか、さ」

「トールちゃん。正論はね、時に人を傷つけるんだよ」

うわぁ……本気で怒ってらっしゃる？ なんか理不尽な気がするんだけど……。

「悪かっ……………うわっ！」

謝ろうとした時、目の前をなにかがよぎった。

「どしたの？」

キヨカはお怒りのまま俺を見た。

「す、すまん。なにか目の前を……うわっ」

と、まただ。なんだ？ 蟬とかか？ 自然がいっぱいだしな……なんてのんきにしていたら、

「きゃっ！」

と、キヨカが手を押さえている。

「どうしたんだ？」

「さっき、なにかが飛んできて……」

なんだ？

と、地面を見るとなにか黒い塊があった——いや、いた。

そいつはぴょんぴょんと跳ねている。

こいつが……………。

しかし、五〇センチはあろうかという黒い物体って……………もしかして……………。

「キヨカ、逃げろ！ じいさんに報せてくれ！」

と、持っていた木刀を構えてキヨカの前に立つ。

「で、でも……………」

キヨカは手を押さえたまま立ち尽くしている。

「急げ！ こいつは多分あの石棺から出てきたヤツだ」

急ぎ立てるがキヨカは動けずにいた。

ったく……。

「うわぁぁあっ！」

木刀でどれだけできるかわからないけど、とにかく斬りかかる。



しかし、その黒いやつは難なくかわしやがった。ちくしょう……俺の実力じゃ無理だったのか。

「トールちゃん……」

「来るな！」

傍に来ようとするキヨカを静止させる。せめてキヨカだけでも護らないと。それが、男の子の意地です。

「ったく……厄介なヤツだな」

木刀を正面に構えそいつを見据える。迂闊に動いてもさっきみたく避けられるだけだろう。こいつはなかなかすばしっこい。だとすれば……待つしかない。

「トールちゃん……」

「大丈夫だから。俺がなんとかするから、お前はそこに隠れてろって」

心配そうなキヨカを安心させるために笑顔で言う。

キヨカは、わかったと頷いて祠に隠れた。その時、ちらりとキヨカの手には赤いものが見えた。端から赦すつもりなんてないけど、あいつに怪我させちゃってるようだし、なにがなんでも俺がなんとかするしかないようだな。

ぎゅっと木刀を握りなおし、目の前の黒いものを睨めつけた。

**(C)2012 STUDIO SAIX All Rights Reserved.**

キヨカは祠に隠れるようにしてその様子を見守っていた。

(トールちゃん……大丈夫かなあ)

対人での剣道勝負ならトールが負ける事はないと思っている。それは、昔の稽古を見ていればわかる。

でも、今回の相手は人間じゃない。得体の知れない黒いやつだ。それも、かなりすばしっこい。

(頑張っ)

キヨカは心の中で何度も祈った。

見るのが怖いという思いと、見守ってほしいという思いがせめぎあう。キヨカは祠に手をつき、上半身だけ乗り出すように見ている。

「我 資格者(ティトーロン)を認めたり 汝との契約を承認 履行する、

キヨカにその言葉が聞こえた。いや、聞こえたというよりは、脳内にそのまま響いたようだった。

「な、なに？」

キヨカは何事かとキョロキョロと周囲を見回す。が、誰かがいるような感じはない。もしかして幻聴……？ それとも……？

と思った時、

(えっ?)

左手が熱くなるのを感じた。熱湯や火のような熱さとは違い、中から湧き上がってくるような熱さだった。

(な、なに?)

戸惑いを隠せないキヨカだったが、どうしていいものかわからず動けない。熱いのだが、逃げたいような嫌な熱さではない。

次第にそれは全身に広がっていく。

まるでなにかが体内に侵入してきたみたいだ。

「っ！」

左手の甲にちくりとした痛みを感じて思わず声を上げた。

(なんだろう?)

そう思って見ると、

「きゃっ！」

思わず悲鳴を上げてしまう。

左手の甲が黒くなっていた。

「な、なに？ なに、これ。ちょっと……」

手をブンブンと振って払おうとしても払えるはずもない。

キヨカが手を振っている間に、手の甲の黒いものは形を変えていった。それはやがて蜘蛛(くも)の形に変わった。

「ほ、ほえ？」

キヨカはその変化に驚きを隠せない。

「我は門番(ポーディスト) 蜘蛛(アラネーオ) 資格者(ティトーロン)よ 我を召喚せよ、

また頭の中に響いた。

(え？ なに？ 召喚？)

わけがわからないのだが、その方法はわかってしまう自分が不思議で仕方ない。

「ええい、なるようになれ！」

キヨカは半ばやけくそで自分の左手の甲に八角形を描き対角線を引いた。

手の甲が熱を持ったかと思うと、そこから黒いものが飛び出した。

**(C)2012 STUDIO SAIX All Rights Reserved.**

トオルは木刀を中段に構え、目の前の黒いものから目を逸らさない。一瞬でも気を抜けない。じっと相手の動向を窺う。剣道の試合ならば相手の呼吸を読む事ができるのだが、今回ばかりはそうはいかない。

(やりづらいけど……そんな事言ってる場合じゃないしな……)

心の中で舌打ちする。

(ともかく、なんとかしないと、だな)

トオルはゆっくりと呼吸を繰り返す。

右足を少しずらす。と、その刹那あの黒いものが跳びかかってきた。

トオルは木刀で薙ぎなんとかわす。

弾かれたそいつは、再びトオルに襲い掛かる。その行動は着地と同時だった。

その思わぬ早い行動にトオルはついていけない。側面からの直撃を受け吹っ飛ばされる。

「こんなもん、じいさんのしごきに比べたらなんでもないね」

トオルは顔を歪めながら、木刀を杖代わりにして立ち上がった。

そんな満身創痕のトオルに容赦なく黒いものが襲い掛かる。

(一撃でダウンってのは……問題外だろ、それ)

トオルはなんとか木刀を構えようとするが、膝が笑って上手く立てない。

(情けないな……)

自嘲しつつなんとか自分を奮い立たせようとするが全く力が入らない。

(ごめん、キヨカ……)

護りきれなかった事を悔いた――時、黒い影がトオルの前に立ちふさがり、跳びかかってきた黒いものをはじき飛ばした。

「な、なんだ？」

トオルはわけがわからず目の前の黒いものを見る。

どう見てもさっきまでのヤツの仲間というか同類にしか見えない。

違いといえば、そいつは三メートルはあろうかというくらい大きく、八本の脚を有しているという事くらいだろう。

「トールちゃん、大丈夫？」

キヨカがトオルに駆け寄る。

「お前……」

トオルが茫然としている間にも、目の前に現れたそいつは、今までトオルが相手をしていた黒いものを糸で絡めとってしまった。そして、それを捕食しだした。

トオルは、なにが起きているのか理解できず、ただただそれを見ているしかなかった。

捕食を終えたそいつは、キヨカの手には吸い込まれるように姿を消した。

***(C)2012 STUDIO SAIX All Rights Reserved.***

「うわあああっ！」

トオルは自分の叫び声で目を覚ました。

周囲を見回すと、どうやら遠野家のような。畳の匂いがする。この匂いはやっぱ落ち着く。

「やっと起きた」

枕元に座っていたキヨカが笑顔で言った。

「なんか怖い夢でも見ていたのかな……よちよち」

と、頭を撫でられる。

なんかムカツク。

「ええい、やめい！」

と、キヨカの手を払うと、

パシャン！

と、竹刀が炸裂した。

「ってえ……」

誰だよ……なんて考える必要はない。じいさんめ……。

「くうおらあ！ なにをしておるのじゃ、この莫迦弟子が！ わしの愛孫の厚意を邪険にすると  
は不届き千万！ 不届き至極！ お前は全世界の恥じゃ！」

……なにを言ってやがる、この老人は。どうもついていけない。

っていうか、マジで痛い。それどころか、全身が痛い。

なんだか、ここ最近こんなばかりだな。この村に来てからというもの、立て続けにぼこす  
かにされてる気がする。もうちょっと若者を労(ねぎら)ってほしいものだ。

「じいさん……」

「しかも、お前はわしの愛孫を護れなかったようじゃないか！ まだまだ鍛え足りないようじ  
ゃな！ 今すぐしごいてやる、表へ出ろ！」

俺の反論を遮るまではよしとしておこう。本当はそうしたくないけど。しかし、しかしだ。

「おい、じいさん……」

俺はじいさんに腕を掴まれ、ずるずると引きずられている。

なんだ、この仕打ちは。

確かにキヨカを護れなかった……って、おい！ あれからどうなったんだよ！

「な、なあ、じいさん……。おい、キヨカ……」

俺の言葉は悉(ことごと)く流され、誰の耳にも届いていない。

とにかくこうして無事だったからそれでいいって事なのか？ ちょっとくらい説明してくれて  
もよくないか？ むしろ、説明プリーズ！

されど世は無常。俺はなす術なくじいさんに引きずられているというのが現実だ。

なんか世の中、間違ってる気がしてならない。どうして俺はこんな目に遭わなければいけない  
のだろうか。誰がそんな事を決めたというのか。もしかして、どこかで神様たちが俺を好き勝手

にいじくって遊んでいるんじゃないだろうか。リアル人生ゲームみたいな感じで。

いかんいかん、思わぬ被害妄想を。

というわけで、一切の説明がないまま表に連れ出された怪我人の俺。あの……そうなんですよ、怪我人なんですよ。わかってますか……？ って、無駄ですね。

「修練不足かのう……。それとも、抜けんかったという事は、資格がないという事なのか……だが、こいつなら……」

じいさんは、なにかぶつぶつ言ってるが……なんの事だ？

「ともかく、お前は修練が足りん！ 素振りでもしてろ」

理不尽にもそう言い渡され、またあの重い木刀を渡された。

そういや、こいつは折れなかったんだな。重いだけあって頑丈だったのか？ まあ、別になんでもいいけど。

「わかりました」

と、おざなりに言った瞬間に竹刀が飛んでくる。

「シャキッとせんか！」

「すみませんでした！」

深々と礼をする。ここで逆らえば怪我が増えるだけだ。心の傷は増えるが……諦めよう。諦めを覚えたら負けのような気がしなくはないが……ともかく考えないようにしよう。

そんな考えを振り払うように木刀を振る。そりゃもう一心不乱に。

俺がきちんと素振りをしているのを確認すると、じいさんはどこかへ行ってしまった。

念のため言っておくが、じいさんがいなくなったからってサボるなんて事はしないぞ。

「頑張ってるね、トールちゃん」

と、キヨカが金属製の木管楽器を持ってやってきた。

「まあ、な。なんだかんだでキヨカを護れなかったし、さ」

なんか照れるな。つうか、己の不甲斐無さを恥じるね。テレリコしてる場合じゃないっての。

でも、こうして励ましてもらうってか、応援してもらうのって嬉しくて、こそばゆいな。

「殊勝だね……。なんか似合わないよ」

「るせえ」

いつもと変わらないやり取りがとても嬉しい。

「私も久しぶりに吹こうかな……」

と、持っていた金属製の木管楽器に口をつけて演奏し始めた。

相変わらず上手い。ガキの頃、キヨカにハーモニカを自慢して、その自信を悉(ことごと)く打ち砕かれた過去を思い出したが、それもいい思い出としておこう。そもそものレベルが違った。次元が違うってのは、こういう事なんだと思ったね。

それにしても、金属製の木管楽器——ええい、なんだかこの表現が鬱陶しくなってきた。金属製の木管楽器——フルートの音色を聴きながらの素振りってのもなかなかいいな。

しかし、どこかぎこちない感じがする。確かキヨカの腕前はプロ級だった。なのに、今はそん

な感じがしない。俺が記憶を美化してしまっているのだろうか。それとも、俺の感性が変わってしまったとか？ いやいや、記憶違いでも俺の耳がおかしくなったわけでもないはずだ。

キヨカ、調子でも悪いのか……と訊こうとしてキヨカを見た時、全ての謎が解けた。キヨカの左手には包帯が巻かれていた。これが、指の動きを邪魔してるのか。

「キヨカ、その手……」

訊かずにはいられなかった。

「ああ、これ。ちょっと怪我しちゃって……」

キヨカはペロリと舌を出して笑う。

確かにあの時キヨカは怪我をしていた気がする。もうちょっと俺がしっかりしていれば……。悔やまずにはいられない。

演奏する者にとって、指は命だろ。俺はそれを護れなかった。傷つけてしまった。最低だな。

「ごめんな、キヨカ」

「どして？ 別にトールちゃんが悪いわけじゃないじゃん。それに、こんなの大袈裟なんだって。トールちゃんもおじいちゃんの溺愛ぶりは知ってるでしょ」

確かにあのじいさんならあり得る。本当に大怪我だったらフルートを演奏するなんて無理だろうからな。それでもやっぱり傷をつけてしまったのは俺が悪いと思う。でも、キヨカはその言葉を受け入れないだろう。だから、心の中で謝しておく。

「そうだな。んじゃ、続けるか」

気にしないというか、もうこの話はお終いって事で、再びキヨカのフルートを聴きながら素振りをする。

綺麗な曲を聴きながらだと、ただの素振りも楽しくなってくる。リズムに合わせて……というか、キヨカが合わせてくれているのか、すごく振りやすい。

そんな素晴らしいBGM付きの素振りは陽が沈むまで続けられた。

**(C)2012 STUDIO SAIX All Rights Reserved.**



その日もいつもと同じようにキヨカの演奏付きで木刀を振っていた。

最初の頃は重かったが、今では自分の身体の一部のように軽い。

「どうじゃ、調子は」

と、いつもなにをしているのか謎なじいさんがやってきた。こうして顔を出すのは珍しい。なんせ、じいさんと顔を合わせるのは食事時くらいだったからな……。

「なかなかいい感じだぜ。いつでも大丈夫って感じだな」

「そうか。気を抜かずに」

それだけを言うと、じいさんはまたどこかに行ってしまった。えらくあっさりしてるな。

ホント、このじいさんはいつもどこでなにをしてるんだ？ 家にはいないようなんだが……。

詮索してもしょうがないし、直球で訊いても無視されるだけだ。もちろん変化球で訊こうと無駄な事だ。カーブでもフォークでもシュートでもスライダーでも……って、意味わからん。無駄に一人ノリツッコミ。

とにかく、じいさんに関しては気にしたら負けなのだ。謎すぎる。

そんなどうでもいい事はさっさと忘却の彼方へ追いやって素振りに集中する。

なんだか、毎日同じ事しかしていない気がするけど、妙に充実感はあるんだよな……。

どうしてかな、この平和と危機の背中合わせの状態というか、この妙な緊張感というのが心地いいのかな……。

刺激のなかった平凡な毎日に入れられたスパイスみたいなものなんだろうか。

それとも、ただ緊張のあまり気が高ぶっているだけなのだろうか。変に高揚してると、あとが怖い気がするんだけど、こればかりはどうしようもないか。

でもやっぱ、キヨカの演奏を聴きながら……ってのは、最高の環境だよな。

と思った刹那、キヨカの演奏が止まった。曲が終わったわけじゃない。いつも聴いているんだ、それくらいわかる。

「どうしたんだ、キヨカ」

「トールちゃん……」

キヨカはどこか遠くを見つめた状態で固まってしまっている。

どうしたんだ……？ と、その視線を辿ると……、

いた。

あの黒いやつ——蟲(ベステート)が。

畑に囲まれた道の真ん中に、当たり前のようにそいつはいた。

小中大の団子のような胴体に三対の脚。そして触角のそいつは、間違いなくあの時のやつだ。

思わず木刀を握る手に力が入る。

ピョコピョコと触角を動かして周囲を窺っているという事は、なにかを捜しているのだろう。

おそらく俺たちだ。

やっと出てきたな……。

これで終わらせる事ができる。

「じゃあ、行ってくる！」

俺はそう言って一人で駆け出そうとしたのだが……、

「待ってよ、トールちゃん」

と、キヨカが走ってきた。

ったく……。

キヨカを危険な目に遭わせたくないんだけどな……。だいたい、そんな事してみろ、じいさんになにされるか……。

いいや、違うな。じいさんにどうこうされるってのは言い訳か。ただ単純にキヨカを傷つけたくないだけなのかもな。

「無茶すんなよ」

止めても無駄なのはわかりきっている。

「うん」

そんな俺の言葉嬉しかったのか、満面の笑みで頷いた。

ホント、無茶だけはすんなよ……。

とか思いつつも、一緒にいてくれてちょっと頼もしかったりするの、ここだけの秘密だ。

全速力で走る。

息が切れるのは仕方がないが、あいつに暴れられるのは避けたい。

しかし、じいさんはこんな時になにしてるんだ？

あの腕前は俺としては心強かったりするんだが……頼る事を考えてる時点で負けか。ここは俺がなんとかするんだもんな。

今度こそ負けない。絶対に倒す！

それほど離れていなかったもので、すぐに到着できた。息も切れてない。むしろ、いいウォーミングアップになった感じだ。

「よお、やっと出てきたな」

蟲(ベステート)の正面に立つ。

「待ちくたびれたぜ」

木刀を下段に構える。

その頃になって、ようやくキヨカも到着した。

「はあ……はあ……ちょっと、トールちゃん………速いよ……」

息も切れ切れだな。

「キヨカ、悪いけどちょっと……」

下がっていてくれ、と言う前に蟲(ベステート)が動いた。

「っ！」

しかも、その矛先はキヨカだ。

慌ててキヨカの前に立つ。

と、同時に蟲(ベステート)の脚が襲ってくる。

それを木刀で薙(な)ぐ。

しかし、蟲(ベステート)はビクともしない。

「ったく……文字通り化け物だな、こりゃ」

すぐに上段に構えなおして、今度はこちらから斬りかかる。

しかし、木刀で与えられるダメージってどんなもんなんだろう。通用しているのかすらわからない。いや、倒れないところをみるに、全くとは思いたくないが、効いていないんだらうな。

それでもやめるわけにはいかない。

形(かた)を気にしてる場合でもない。もう、とにかく斬る……いや、木刀じゃ斬れないから殴るの方がいいのかもしれないな。って、どっちでもいい。

その全てが命中しているのだが、蟲(ベステート)は全く動じない。

触角でキヨカを捜しているようにすら見える。どうやら攻撃しているはずの俺は無視らしい。

「ふざけんじゃねえぞ！ ちょっとはこっちも気にしやがれ！」

もう、ほとんどヤケクソだった。とにかく木刀で殴る。それしかできなかった。

「ばっきやろー」

そう叫んで思い切り大上段で殴りかかろうとした時、蟲(ベステート)の脚で弾き飛ばされた。

直撃をくらい、一瞬、呼吸ができなかった。

「このやろ……」

殴りかかろうとしたが、膝が笑ってうまく立てない。

そんな俺は完全に眼中にないらしく、蟲(ベステート)はキヨカを見ている。

動け……動けよ、俺の足！

自分に言い聞かせるが全く動かない。

ちくしょう……。

また護れないのか……。

愕然として膝をつく。

諦めが俺を支配していく。

あれだけ修練して、あれだけ準備したってのに……結局は無駄だったのかよ。俺にはできなかったのか……。

「トールちゃん！」

キヨカ……？

「立て、この莫迦！ 私を護れ！」

キヨカの檄(げき)が飛ぶ。

あいつ……なに命令形で言ってんだよ。何様だ。

でも……そうだよな。俺はなんのために闘おうとしていた？ 村を護るため？ 蟲(ベステート)を解放してしまった責任をとるため？ それもちょっとはあるだらうな。

でも――俺はキヨカを危険な目に遭わせないために闘うって決めたんだよな。

だったら、ここでこんな事してていいのか？ いいや、いいわけねえ！

そういや、すっかり忘れていたよ。修練中もじいさんに言われたっけな。雑念が多いんだっけ

。で、昔じいさんに聞かされた事をすっかり忘れていたんだよな。

サンキュなキヨカ。お前のお蔭で思い出せたよ。

深呼吸をして、全てを吐き出す。

目を閉じ、手にした木刀に全神経を集中させる。

今手にしているのは俺の身体の一部。俺の意のままに動く。

俺は俺自身の手でキヨカを護る。

心の中で念じてゆっくりと目を開ける。

そして――

雄叫びを上げながらキヨカに迫っている蟲(ベステート)目掛けて走る。

そして、思い切り振りかぶって殴りかかる。

蟲(ベステート)はぐらついて倒れた――となればかっこいいんだが……実際は、ビクともしていない。

「どうなってやがるんだよ」

と、愕然とする暇もなく蟲(ベステート)が脚を振り下ろしてきた。

今まで無視され続けていた事を思えば効果があったと考えていいだろう。

ようやく相手をしてくれるってか。

って、それよりもやばいって……。

と、木刀の両端を持って脚を受け止める。

ものすごい力だな……。でも、この木刀なんともなさそう。折れそうなくらい力が掛かっているのに。

やっぱ頼もしいぜ、相棒。

しかし……ここからどうするか、だよな。

動けない。

ギシギシと身体が鳴っているみたいな感じだな。

だけど諦めるわけにはいかない、ここで退くわけにはいかない。

「こんちくしょう！」

気合を入れて振り払おうとした――ら、木刀の両端を持っていたはずの手の距離が伸びた。

えっ？

伸びた？

俺、離してないよな。

どうなって……と、目の前のものに啞然とした。

そこには、白く輝く刀身があった。

は、はいいい？

どうなってるんだ、これは。

俺が木刀だと思っていた……ってというか、木刀にしか見えなかったんだが、これって真剣？

待て待て。確かにこれは普通の木刀よりは重かったけど……マジで？

でも、目の前にこれがあるんだから信じないわけにはいかないよな。

とにかく、後ろに飛び退いて、そいつを抜く。えっと……鞘の部分はどうか。ええい、置いとけ。と、丁寧に地面に置く。

しかし、真剣を振るなんて初めてかもしれないな。居合いはしてなかったからな……。でも、今まで知らなかったとはいえこいつを振っていたわけだし。それに、俺の相手は人じゃない。蟲(ベステート)だ。気分的に斬りやすい。

「ここからが俺の本気だぜ」

白く輝く刀身を中段に構える。

その光に反応したのか、蟲(ベステート)が俺に興味を示した。望むところだ。

「トールちゃん……」

心配そうに見ているキヨカに頷いて返事をする。

任せとけて。

だが、俺はその時見逃していた。キヨカが泣いている事を――

**(C)2012 STUDIO SAIX All Rights Reserved.**

「トールちゃん、ごめんね」

キヨカは涙を流して呟いた。

「ごめんね。ごめんね……」

何度も何度もその言葉を繰り返す。

そして、左手に巻きつけた包帯を解いていく。

しゅるしゅると解かれていく包帯。

全て解かれたそれは、ふわりと風にその身を任せて舞う。

包帯を解いたその下には、甲に描かれた黒い蜘蛛(くも)の痣(あざ)があった。

「ごめんね、トールちゃん……」

そう呟いて、キヨカは甲に八角形を指で描き、対角線を引いた。

(お願い！)

対角線が引かれた瞬間、甲の黒い蜘蛛(くも)の痣がゾワゾワと動いた。

と、次の刹那――そこから黒いものが噴き出す。そして、それは巨大な蜘蛛(くも)の形になった

。

(な、なんだ、あれ……)

あまりの事に驚きを隠せなかったが、ちょっと待てよ……と、この前の事を思い出す。そういや、あの時も確か……。あいつが門番(ポーディスト)だったっけ。

でも、それがどうしてキヨカに……。もしかしてあの包帯は……。

なんだよ、それ。

なんか全部が赦せない。なにより、キヨカに気付いてやれなかった俺が赦せない。

だが、今はそんな事よりも――目の前のこいつをなんとかしないとイケない。

俺は刀で蟲(ベステート)の脚を薙ぐ。

さすがに効果はあるようで食い込んだ。

(よしっ)

そして、思い切り引く。

蟲(ベステート)の足はまさに皮一枚で繋がっているようにブラブラとしている。そのくせ普通に立とうとしたものだから、自重で脚が折れた。そして、そのままバランスを崩して倒れる。

どんなもんだ……と思う間もなく、あの蜘蛛(アラネーオ)が蟲(ベステート)に近付いてきた。

巨大な蜘蛛(くも)が迫ってくるという恐怖で思わず斬りそうになったが、一応は味方なんだよな……と思い留まる。

っていうか、こんな三メートルくらいもある巨大蜘蛛(ぐも)は怖いって。

情けないがその場を離れる。い、いや、俺はこの刀の鞘を取りに行くだけさ。はははっ……。

俺に脚を斬られた蟲(ベステート)はなんとか立とうともがいている。

そこへ蜘蛛(アラネーオ)がしゃかしゃかと近付きのしかかる。

それからの光景は、正直気持ち悪かった。

蟲(ベステート)にのしかかった蜘蛛(アラネーオ)は、なんと捕食し出したのだ。

めきよめきよと食べられていく蟲(ベステート)を見て、少し可哀相だな.....と思った。

蟲(ベステート)を食べ終わると、蜘蛛(アラネーオ)はキヨカの元へ戻っていった。そして、そのまま姿を消した。

「キヨカ.....」

思わずキヨカに駆け寄る。

「トールちゃん.....」

しかし、その手前で立ち止まってしまった。

キヨカが泣いてる.....。

どうしたんだ？

「おい、キヨカ.....」

どう声を掛けていいのかわからない。

「トールちゃん、ごめんね。来ないで」

拒絶の言葉だった。

茫然とした俺を残し、キヨカは走っていった。

追いかける。

心の中で自分に言い聞かせる。でも、追いかけてどうするんだ？ 追いかけて、なんて言うんだ？ キヨカに伝える言葉もないくせに追いかけてどうするんだ？

それは追いかける資格がないって事だよな。

なんだろうな。

まったく――

「愚か者じゃな」

そうそう.....って。

「じいさん」

どこから現れたのか、じいさんが目の前にいた。

「お前はなにをしておる。どうしてここにいる」

修練の時とはまた違った真剣さだった。

「お前はなんのためにその風伯(ふうはく)を抜いたのじゃ。まさかこのような愚か者のために、その風伯が力を貸してくれたとは、なんとも慈悲深い事じゃのう」

「じいさん.....」

「トールよ、お前がすべき事はなんだ」

「俺がすべき事.....？」

俺がすべき事って.....。

そんなの、考えるまでもない。

「すまん、じいさん。ありがとうございました」

礼を言う時間ももったいないと思えた。

俺はキヨカを捜して走り出した。

「全く……莫迦弟子が」

背中からそんな呟きが聞こえた。すまん、じいさん。

とにかく会わないと。なんにしてもそこからだ。会ってどうなるかなんて考えるだけ無駄だ。大事なのはどうなるかを考える事じゃなくて、どうするのか、どうしたいのか、だ。

しかし、どこにいるんだ？

遠野家に戻ってるかと思ったけどいないし。

他にあいつが行きそうな場所って……。思い浮かばない。全く、ホントにダメなヤツだな、俺は。

アテがないならしらみつぶしに捜すまでだ。村中捜し回ってやるさ。

遠野家を飛び出し、とにかく走り回る。

どこにいるんだよ。

思えば、キヨカの事ってほとんど知らないんだよな。そりゃ、小さい頃の事は知ってるけど、最近の事なんて微塵も知らないよな。

こりゃ、骨が折れそうだ。

**(C)2012 STUDIO SAIX All Rights Reserved.**



どのくらい走っただろうか。

どこを捜してどこを捜していないのかわからなくなってきた。

おまけに息も切れてきたし……ダメダメだな、俺。こんなんでもキヨカを護るとか言ってたのか。寝言は寝てる時だけにしろって感じだよ。

しかし、もうほとんど回ったはずなんだがな……。

どこに……って、いた。

なんだよ、あの祠か。灯台下暗しって感じがする。

しかし、祠に背を預けて座り込んでいる今のキヨカになにを言ってやればいいんだろう。全然わからない。

いいや、そうじゃないんだよな。

大きく深呼吸をして息を整えてから、ゆっくりとキヨカに歩み寄る。

キヨカは気付いていないようだ。それもそうか。ずっと膝の間に顔を埋めているんだから。

きっと泣いているんだろう。泣く必要なんてないのに。その涙の原因は俺だろうな……というのは自惚(うぬぼ)れかな。

なんて、余計な事を考えるのはよそう。

なにも考える必要なんてないだろう。

そっとキヨカの前に立つ。

ごめんな。ありがとう。

心の中で呟いて――俯(うつむ)いたままのキヨカを抱きしめた。

「トールちゃん……」

こんなか細いキヨカの声を聞いたのは初めてかもしれない。

「……………」

だけど、なにも言えない……というよりも、言葉なんていらぬ。

そう思った。

それが伝わったのか、キヨカは身体を預けてくれる。

「ありがとう」

その言葉が自然とこぼれた。

しばらく二人並んで座っていた。

こうしてぼんやりと空を眺めるのもいい。

「なあ、莫迦な事訊いてもいいか？」

別に沈黙に耐え切れなくなったわけじゃないんだけど訊いておきたかった。本当に莫迦な質問。

「なに？」

「どうして泣いてるんだ？ ……ぐふっ」

肘がきれいに入った。脇腹を押さえて呻く。

「ホントに莫迦な質問だ」

「だから言っただろうが……」

マジで痛い。

「これだよ」

そう言って、キヨカは左手を出した。そこにはあの蜘蛛(くも)の形の痣がある。

「こんなのある女の子ってヤでしょ？」

腕を組んでわざと考えるフリをする。最初から答えは決まってるんだが。

「俺は気にしない」

「嘘だ」

即答。

ここで即答されるのはなんかイヤだな。しかもそういう受け取り方で。

「嘘じゃねえよ、莫迦」

「莫迦言うな莫迦」

「そんな事言うお前はやっぱ莫迦だ」

「なんだと、莫迦莫迦莫迦！」

いつものやり取り。

なんだかとても久しぶりのように思えて笑いがこみ上げてくる。

それはキヨカも同じだったのか、気が付けば二人して大声で笑っていた。

「まあ、トールちゃんがそう言うならそれでいいや」

そう言って、お尻を払いながら、キヨカはすっと立ち上がる。

「そうだぞ。細かい事を気にするのは似合っていない」

それに倣うように俺も立ち上がる。

「それ非道い。それじゃ、私が適当で大雑把みたいじゃないさ」

キッと俺を睨む。でも、それもなんだか可愛く見えた。

「そうだろ」

即答してやった。

「……………」

キヨカはなにも言わず、ぷくうっと頬を膨らませてむくれた。

とにかく一件落着ってとこだな。

しかし、なにか忘れていているような……………。

なんだっけか。

でも、思い出せない程度のものなら別にいいのか……………って、そうだよ、レポートだ。

どうしよう……………。

まさか、今回の事を書けるはずがないし……………。

ホントどうしよう。

***(C)2012 STUDIO SAIX All Rights Reserved.***

なんだかよくわからないが、キヨカと一緒に家に戻ると、じいさんから誰かを迎えに行けと、いきなり命令された。つうか、叩き出された。

「おい、いきなりなんだよ」

「なんだじゃない。お前はさっさと、迎えに行け！ .....待て待て、相手は貴賓(きひん)だからな。わしらのこれからの生活もかかっとるんじゃないからな。もし、なにか失礼があれば、お家取り潰しもあると思え」

.....いつの時代だよ。今時、そんなのあるのか？

「で、その貴賓って誰よ。総理大臣？ それとも天皇？」

まあ、そんな事あるはずないだろうけどな。そういう人種と、接点があるとは思えねえ。

だがしかし、次にじいさんがのたまった言葉は、俺の想像を遥かに超越してやがった。

「相手は神様じゃ」

「.....」

耳をほじる。聞き間違いか？

つうか、今、このじいさんはなんて言った？

神様？

おいおい、そいつはすげえな。ついに、呆(ぼ)けが始まったか。

「おじいちゃん、なに言ってるの？ 神様ってホント？」

「おお、愛孫(まなまご)よ。それが本当なんじゃ。わしらはな、昔から神様の家系にお仕えしておったんじゃ」

「それ、すごいね。じゃあ、私もそうなんだね。神様にお仕えする.....巫女さんみたいな感じ？」

キヨカは、やたらと嬉しそうだ。

「おお、そうじゃのう。巫女姿もええのう」

じいさんは、なにやら妄想し始めやがった。ホント、妄言もそこそこにしやがれってんだ。誰が、神様とか信じるんだよ。いや、宗教的にはありなんだが、実際にいるとは思えないぞ。なんのカルトだよ。

「それはええとして、お前はとっとと迎えに行け」

「だから、神様ってなんだよ。信じられるかっ！」

「そうだろうな。だがな、お前の家系も同じなんじゃぞ」

「同じって？」

「遠野(とおの)家はもちろん、京極(きょうごく)家も同じく、お仕えしておった由緒(ゆいしょ)ある家系じゃ。お前はただの莫迦(まか)じゃがの」

じいさんは、高らかに笑いやがった。

まあ、そんなのはどうでもいいんだ。

つうか、俺の家もそうなのか。なんだ、その神様に仕えるってのは、親からはなにも聞いちゃ

いない。

「その話は、またゆっくりとしてやるわい。公恵(きみえ)さんのように、立派に継いでもらわんと、わしが公恵さんに申し訳が立たんからの」

なんか、マジっぼいんだが……。もしかして、信じていいのか？

じいさんの話は、ほぼ全て信用したくないんだが、今回はあの変なヤツの事もあるしな。あれは、じいさんが言った通りだったわけだし。神様ってのもいるのか？

「というわけで、お前は早く行け。……おっと、今回はな、神様ご本人は来られないそうだが、わしらにとっては、神様と代わらない方だからな、心してお迎えしてこい」

バシバシと竹刀で叩かれて家を追い出される。

出る間際に、迎えに行く相手の名前を言われる。

(椎崎(しいざき)……ねえ。めっちゃ、普通だけどな……)

なんか変わった名前かと思いきや、案外普通の名前だった。まあ、ありふれてるわけでもないけどさ。

村に来るまでのバス通りで待てと言われただけで、相手がどんな人なのかもわからない。

とにかく、行かないわけにはいかない。

自転車に跨(またが)ると、バス通りに向かう。

この村に来るには、別にここだけってわけじゃないけど、車でここに来るならだいたいバス通りだ。よっぽど地元じゃないと、他の道はわからないだろう。

バス通りに到着すると、適当な場所で待つ事にした。

あんまり村の傍(そば)だとまずいだろうから、そこそこ離れた場所で待つ。この道はほとんど車が通らないから、それらしい車が来たらわかるだろう。

そんなこんなで待つ事三〇分くらい。ようやく、それらしい車がやってきた。

あれかな……とっていたら、手前で停まった。

意味もなく、こんな所で停まるとは思えないし、まさか俺をヒッチハイカーだと思わずもない。あの人だろう。

とりあえず、確認するために車に近付いていく。

近付いていくと、車から人が降りてきた。神様と同じって言ってたけど、なんかやばそうな人じゃないよな……とっていると、出てきた人は普通だった。つうか、普通すぎる。この人が本当にそうなのか？

「椎崎さん……ですか？」

見た目じゃ判断できないと思うと、途端に緊張してくる。本当に神様だったらどうしよう。

じいさんの妄言だと思っていたはずなのに、信じている自分に気付く。

「君が、遠野さんに言われて来た案内役？」

車から降りてきた男の人が訊いてくる。

じいさんの名前を知ってるわけだし、どうやらこの人で間違いないようだ。

「京極公(とおる)といいます。よろしくお願ひします」

神様かどうかは別としても、あのじいさんが貴賓と言っていたのを思い出し、きちんと挨拶をする。ここで失礼があっちゃいけないだろう。

ちらりと見ると、相手は俺を見てしきりに頷いている。なんだか緊張してくる。値踏みされてる感じで、正直いい気はしないけど。

「君は自転車だよな」

唐突に言われたので、一瞬だけ反応できなかった。

「大丈夫です。村まですぐそこですし、全力で走れとじいさん……えっと、遠野心貞(きよさだ)師匠に言われてますので」

思わずいつもの調子で、じいさんと言いきってしまった。まずいまずい。なんとか言い直せてよかった。

「そっか。じゃあ、頼むわ。ところでさ、君が蟲(ベステート)を処理したのかい？」

まさかの質問だった。蟲(ベステート)の事も知っているらしい。まあ、神様みたいな人なら当然なのか？

ただ、それはいい記憶はないので、どうしても言い澁んでしまう。

「……俺は、なにもできてないです。キヨカがいたから、なんとかあっただけです」

事実だ。俺はなにもできていない。結局、解決したのはキヨカだ。門番(ポーディスト)とかいう蜘蛛(アラネーオ)の力を借りて、なんとかできただけだ。それも、キヨカが頑張ってくれたお蔭だ。俺は完全に足手まといだった。

「なるほど……そのキヨカって子が、四刀(しとう)を抜いたのか」

「いいえ、抜いたのは俺です」

そこは訂正しておく。あの風伯(ふうはく)を抜いたのは俺だ。別に誇るわけじゃないけど、キヨカに負担ばっかなのは、俺のちっぽけなプライドが赦さない。

「どういう事だ？」

椎崎さんが、不思議そうな顔で訊いてくる。

なるほど……。きっと、風伯でしかなんとかできないと思ってたんだろう。

確かに、あれはすごいもんなんだろうけど、それよりも門番(ポーディスト)の方がすごい。あれこそ、それ専門だろう。

「門番(ポーディスト)じゃないと、あれをどうにもできなかったんです。俺は、風伯っていう刀を抜いたんですけど、ほとんど役に立たなくて……。キヨカに全部してもらったみたいなものです」

俺の説明に、椎崎さんはなんとか納得しようとしているみたいだった。きっと、納得は難しいかも知れない。きっと、門番(ポーディスト)の情報が欠落しているのだろう。

「まあ、その辺は、逢稀(あき)に行ってから、遠野さんに訊いてみるよ。じゃあ、案内よろしく」

俺もそんなに理解できてるわけじゃないし、その辺はじいさんの方が詳しいし、説明はじいさんの役目だ。

「わかりました」

俺は案内するのが役目だ。

とりあえず、自転車に跨(またが)る。

「それじゃ、ついてきて下さい」

そう言って、全力で走り始める。

ひたすら全力で走る。

だって、相手は車だぞ。本気でこがないと、すぐに追い抜かれてしまう。あんまり、のろのろ運転させるわけにもいかないだろう。快適に運転してもらっておかないと、後でじいさんになにされるかわかったもんじゃない。

とにかくこぎまくる。

さすがにずっとは無理だった。途中からへばってきた。

それでも、力の続く限りこぎ続ける。

もう、死にそうだ。足がちぎれそう。もう、感覚も微妙だ。

なんとか村の入り口が見えてきた。

ここから、じいさんの家までまだまだだ。ちくしょう、遠い。

しかも、舗装された道じゃないし、走りにくい。注意しないと、転びそうになる。

「こ、ここです……」

ぜいぜいと息をしながら言う。もう、息ができない。身体中が酸素をプリーズとシャウトしている。

ああ、脳内にオキシジェンが不足している。

とにかく、これで俺の役目は終わっただろう。こんだけやったんだ、じいさんも納得するだろう。

**(C)2012 STUDIO SAIX All Rights Reserved.**

家の中まで案内しようとする、車の音を聞きつけたのか、じいさんが家の中から出てきて出迎える。

こんな事するなんて、まずなかったぞ。あのじいさんでも、こういう事するんだな。それだけの相手って事だよな。さすが神様。正確には、その関係者か。

「わざわざお越しいただきまして、申し訳ございませんでした」

こんなに姿勢が低いじいさんを初めて見た。

「いえいえ、急にすみません。早速ですけど、なにがあったのか教えていただけますか」

「もちろんです。ささ、中へどうぞ」

じいさんに連れられて、椎崎さんは中に入っていく。

「おい、お前も同席せんかい」

.....椎崎さんがいたお蔭で、竹刀がなくてよかった。この状態で叩かれてたら、再起不能になっていたかもしれない。

痛む足を押さえつつ、それでも足を引きずりながら家の中に入る。

客間のテーブルには高級そうなお茶と、ふかふかの座布団が上座にあった。なんだ、これは。そして、じいさんの座布団と、キヨカの座布団が敷かれている。その前には、同じものだろうお茶がある。

俺のは.....ですよねえ。あるわけない。

じいさんは、椎崎さんの近くに座っていた。キヨカは、少し離れて座っていた。緊張しまくってるのが面白い。

「これ、早く座らないか」

じいさんに急かされて、キヨカの横に座る。

座布団がないし、足は痛いしで大変だ。それでも、正座しないとまずいんだろうな。痛む足を押さえつつ、正座をする。

「お待たせ致しました。それでは、ご報告させていただきます」

そう前置きして、じいさんは事の経緯(いきさつ)を説明し始めた。

改めて聞くと、大変な事だったんだな.....と思わされた。でも、なんだか知らない単語がちらほらあった。それでも、椎崎さんは頷きながら聞いている。

俺とキヨカは、途中からあんまりわからなくなってきたが、ここを離れるわけにもいかず、とりあえず聞いていた。

そんな講義のような話が、ようやく終わった。

やっと終わった.....と思いきや、じいさんが巻物を出してきた。

「これが、蟲(ベステート)に関して記述されております巻物です」

テーブルに広げる。

俺にはさっぱり読めない。



「これが、この村に封印されいた蟲(ベステート)に関しての……」

椎崎さんは、嬉々として見ている。

「ここに、蟲(ベステート)は一六封印されているとあるのです」

じいさんが、巻物の一カ所を指す。

「確かに……。確か、先程の話では、今回確認したのは二種類だったと……」

そうだ。確かにあの団子に脚が生えたようなあいつだけ……いや、違う。最初に、なにかがいっぱい飛び出すのを見ている。

どうしても、あの光景が印象深かったが、その前にもびよんびよん跳ねるヤツが……。その時は、意識を失った気がするし、訊いてもキヨカはなにも教えてくれなかった。

あれは、やっぱりそうだったんだ。

マジであと一四もあんなヤツがいるってのか。

「そうです。この二人が再封印できたのは、たったの二匹。残りは、別の世界へ移動したものと考えられます」

「別の世界……。なるほど、世界を移動していくわけか。って事は、時空(とき)の能力者でないと無理って事になりますね。この二人は……」

と、俺たちを見る。

じいさんは、残念ながら……と首を振る。

「もっとも、昔はなくとも、風伯に選ばれ、門番(ポーディスト)に選ばれた今なら、もしかすると宿っているかもしれません」

「確認する必要があるわけですね」

「そうなります」

「でも、そうじゃないと困る事になるかもですね。俺たちだけだと、とてもじゃないけど蟲(ベステート)を封印できない。どうしても、彼らの力が必要になってくる」

世界を移動って、もしかして世界旅行か？ でも、能力者とか……なんだ？

「とりあえず、電話を貸していただけますか」

「ええ、どうぞどうぞ。こちらです」

じいさんが先導していく。

俺だと金を取ったのに、この人だとこんなに笑顔なのか。権力に媚(こ)びるじいさんじゃないと思ってたが、どうやら違っただけ。でも、正直なところ、この人がそんなに偉い人なのかわからない。ただの、普通の人にしか思えないんだけどな……。でも、神様と同等って言うてるし……。俺にはわからん。

じいさんと椎崎さんが出ていくと、途端に空気が弛(ゆる)んだ。

「ふい～、なんか緊張したよ」

キヨカが待ってましたとばかりに足を崩す。

「すごい疲れちゃった。トールちゃんはどうだった？」

「いや、緊張しまくったね」

俺も足を崩す。

「きちんとしてないと、じいさんになにされるかわかったもんじゃないしな。でも、神様と同じみたいな事を言ってたけど、あの人ってなんだろうな」

俺の質問に、キヨカはわからないと首を振る。

「でも、すごい人なんだよね」

「じいさんを信じるならな」

「きっと、すごい力があるんだよ」

「.....まあ、そうだろうな。超能力とかって、信じてなかったけど、今なら信じれるしな」

自然とキヨカの左手に目がいてしまい、慌ててそらすけど、キヨカに気付かれてしまった。

「やっぱり、これだよな.....」

キヨカは自分の左手を隠すように押さえる。

今は包帯で見えないけど、そこには奇妙な痣(あざ)がある。俺は別に気にしないんだけど、やっぱり女の子ってだけで気にするよな。

「俺も、わけわかんねえけど、あの木刀まがいの真剣を抜いたわけだし。そもそも、なんとかって言うヤツの封印を解いたのって、俺たちだもんな」

「そうだよな.....。私たちがやっちゃったんだよな」

やっちゃった事を今更どうしようもないんだけど、その重大さにどうしても落ち込んでしまう。ちょっとガラスを割ってしまった.....なんてレベルじゃないしな。どうやら、世界を巻き込んだものらしい。

「やっぱり、俺たちがなんとかするしかないんだよな」

「そうだよ。トールちゃんは、あの刀を使えるし、私は蜘蛛(アラネーオ)と一緒に闘えるんだよ。だったら、なんとかしないとだよな」

ああ、と頷く。

椎崎さんも言っていたけど、俺たちにしかできないだろう。あの人がどんな力があるのか、そんなのは知らないけど、俺たちは実際になんとかしたんだ。できれば、あとは大人に任せたいのが本音だけど。

所詮、俺たちは学生だ。今までなんの不思議な力もなかった、ただの学生になにができるんだろうな。

「でも、世界旅行できそうだよな」

キヨカは無理にでも楽しくしようとしているみたいだけど、正直なところ俺も同じだ。

「確かに。でも、そんな金ないぞ。じいさんが出してくれるのか？」

「.....トールちゃん、現実的すぎるよ」

「そう言ってもさ、俺たちが行かされそうだし、マジに考えとく方がよさそうだよ」

「.....そういえば、パスポートない」

「あ、俺もあつたかな.....。いや、作った記憶がないな」

まったく.....レポートもしないとだしな.....。俺の単位がまずい。

夏休み中に終わるのかもわからないしな。世界一周って、どのくらいでできるんだ？ 二ヶ月は掛かるだろうな。そんだけじゃ無理だよな。一年とか掛かったら、マジで留年だよ.....。

「でも、学校休めるし、いいかも」

キヨカは、わくわくと胸躍らせている。

「俺は、休むと大変だけどな。お前もさ、出席日数足りなくなるぞ」

「……………ホント？」

「そりゃそうだろ。どのくらい掛かるかわかんねえんだぞ。半年くらい掛かるかもしれないんだし、そんなの確実に留年決定だろ」

「それ困るよ。同級生を先輩って呼ばないといけないなんて、それは無理だよ。後輩に気を遣われるのとかって、絶対無理」

どうやら、事の深刻さを理解してくれたようだ。

「とにかく、俺たちしかできない事じゃないなら、あの神様とかに任せてもいいんじゃないか？」

「でもさ、私たちが……」

「それはわかってるって。でも、俺たちは学生だぞ。大人に任せるってのもありじゃないか？」

「それは正論だと思うけど、そんなんでいいのかな？ 私たちは未成年だけど、だからって赦されるとは思えないんだよね……」

「その通りじゃ！」

と、いきなりじいさんの声が割り込んできた。

「なにを逃げようとしとるんじゃ。お前が封印を解いたんじゃろうが。それに、風伯を抜いたのもお前じゃ。これは、お前にしかできん。もっとも、蟲(ベステート)の封印は心歌(きよか)にしかできんのじゃがな」

……言われなくても、わかってたんだよ。でも、こうして言われると、ホントにムカつくな。

「やっぱり、私たちじゃないとダメなのかな？」

「そうだね。君たちにしかできないと思うよ」

椎崎さんが会話に入ってきた。

「俺たちでなんとかできるものならしたいけど、四刀は彼にしか使えないし、封印の力は君しかないようだ。とにかく、世界を移動できるかどうかなんだが……」

そう言って、椎崎さんはなにかを探すように視線を移動させる。

「まあ詳しい事は、後になりそうだけど、璃織魚(りおな)さんに調べてもらうしかないかな」  
知らない名前に首を傾げる。

「ただ、時空(とき)の能力(ちから)があるかは……外に出ればわかるか」

ちょっといいですか、とじいさんに言って、外に向かう。

「お前たちも行くんじゃ」

なんだかわからないけど、外に行くらしい。

つうか、もう真っ暗だぞ。なにをするつもりなんだ？

「どっかにないかな……」

外に行くと、椎崎さんがなにかを探しているところだった。なにがあるってんだろう？ この田圃(たんぼ)や畑(はたけ)しかない田舎に。

「ございますか？」

「ちょっと待ってくださいね……と、あったあった」

椎崎さんは蔵の方へ歩いていく。

「ほれ、行くぞ」

じいさんに急かされてついていく。

着いたのは、北の蔵だった。

「ここ、なにか見えるか？」

椎崎さんは、蔵の傍を指している。

そこには、建物なんてあるはずもないし、そもそも靈感だってないから、そういった類のものが見えた事もない。

それでも、言われるがままに俺とキヨカはそこを見る。

「……………っ！」

俺は思わず、隣にいたキヨカを見る。どうやら、キヨカも同じらしく、驚いた顔で俺の方を見ていた。

「トールちゃん……なに、あれ」

俺はわからないと首を振る。

「どうしたんじゃ？ ほれ、さっさと報告せんかい」

じいさんに尻を叩かれる。

「いや、ほら、あそこ……あんなん、あったか？」

俺は椎崎さんが指している場所と同じ場所を指す。

「……なにかあるのか」

「なにかって、あそこだよ」

「心歌も見えるのか？」

「うん、なに、あれ？ あんなのなかったよね」

「なるほど……」

じいさんは納得するように頷いて、椎崎さんを見る。

「どうやら、この二人には必要な能力(ちから)が目覚めておるようすな」

「そうみたいですね。詳細は、やっぱり璃織魚さんに見てもらおうしかないですけど、これで最低限の条件はクリアしましたね」

俺たちを放置して、二人で確認している。

「これって、なんだよ」

「ええい、きちんと訊かんか」

と、じいさんに叩かれる。

「そうだな。ちゃんと説明しておかないと、わかるはずないよな」

椎崎さんがこっちを見る。

「まあ、君たちなら、いいパートナーになれるんじゃないか」

俺たちを交互に見ながら、なにかニヤニヤしている。

「おっと、説明だった。遠野氏には見えていないと思いますが……」

じいさんが無言で頷く。

「ここに見えてる黒い穴」

そうだ。そこにはなにか穴がある。

壁なんかあるはずもないし、空中に穴がある。それはまるで、ブラックホールにも見える。

「これは『時の口』と呼ばれている」

「『時の口』……？」

キヨカが復唱する。

「そう、この『時の口』は、時空(とき)の能力者にしか見えない。つまり、これが見えるって事は、君たちは時空(とき)の能力者ってわけだ」

「ときののうりょくしゃ？」

思わず呟いてしまったが、あまりの事に変換できない。

「まあ、俺もそうなんだけど、詳しく説明もなにも、簡単なもんだけどな」

そう前置きして、

「時空(とき)の能力者は、男女のペアだ。そのペアで時空(じくう)を超える事ができる」

俺とキヨカは、疑問符でいっぱいになる。

この人はなにを言ってるんだ？

時空(とき)の能力者だの、時空(じくう)を超えるだの……どこのファンタジー世界……と決めてかかるわけにもいかないのか。俺たちは、そういう体験をしてたんだった。

あまりにファンタジーな事を言われたから、すっかり忘れていた。

「時空(じくう)を超えるって言われても、そう簡単に想像できないか。そうだな……どんな世界でも、どんな時間にでも行ける能力(ちから)だ」

余計にわからなくなった。

そんな俺たちを見かねてだろうか、腕を組んで少し考えている。

「少し具体的に説明するとだな、室町時代だろうが、異世界だろうが、未来だろうが、世界を統率しているような特殊な世界だろうが、どこにだって行ける。ただし、自らが望む場所に行けない事の方が多い。もっとも、俺は望む世界に行ける能力(ちから)があるから、自由に行けるけどな」

後半は、自慢そうに言われた。

「……すごいね、それ」

キヨカは、目をキラキラと輝かせる。

「すごいよ、トールちゃん。世界旅行だけじゃなくて、時間旅行もできるんだよ。しかも、別の世界にも行けるって……すごすぎだよ」

キヨカがきゃっきゃとはしゃぐ。

「まあ、すごいよな」

俺はといえば、内容が内容だけに理解できていない。つうか、なんだそれは。

「でもよ。異世界ってあるのか？ ない場所には行けないだろ」

異世界って事は、地球以外って事だよな。かといって、別の惑星ってわけでもないだろうし。それはそれで行けるなら行ってみたいけど。

「異世界はあるぞ。どんなのを想像してるかわからないが、実際はもっとすごい。結構色んな場所に行ったけど、どこもインパクトがあるぞ。きっと、俺が知らない世界がまだまだあるんだろうな……」

どこか遠くを見つめている。

「ともかく、君たちには、そういう能力(ちから)がある。その能力(ちから)を使って、蟲(ベステート)を封印して行って欲しい。とまあ、これはこれで急を要するんだが、まずは準備が必要だな。……とまあ、とりあえず家の中に戻ろうか。それに、今日は遅いし、もうそろそろ俺は宿に戻ります」

「泊まって行って下さって構わないのですが……」

「それはありがたいですけど……宿に荷物もありますんで。明日は、一度戻ってこれからの事を検討しないといけませんし。それでなんですけど、お借りできるものだけでいいんですけど、いくつか資料をお借りできませんか」

「ええ、もちろんです。元々、これは詩稀(しき)の方々のためのもの。しかも、神崎(かんざき)様のお役に立てるものでしたら、拒む理由は露ほどもございません。好きなものを、どうぞ」

「そうですか……。できれば、今回の事に関係ありそうなものを、見繕っていただけるとありがたいんですけど……」

「もちろんです。早速、いくつか思い当たるものを見繕います。ほれ、お前も手伝え。お前は西の蔵で待っておれ」

やたら張り切っているじいさんに言われて、西の蔵に移動する事になる。

「トールちゃん、私も手伝うよ」

「助かる」

じいさんは鍵を取りに家に戻ったが、俺たち三人は西の蔵へ移動する。

**(C)2012 STUDIO SAIX All Rights Reserved.**

どの蔵も同じ造りだが、どうやら中に入ってるものが全然違うらしい。じいさんの許可なしで入れないから、詳しくは知らないけど。

しばらくして、じいさんが鍵を開ける。

重い扉が開かれると、なんだか緊張する。そういや、ついこの前も忍び込んだんだっけか。灯りを点けると、様々に詰め込まれたものが押し寄せてくるみたいだった。

巨大な蔵に、ぎっしりと色んなものがある。

本から、なにかよくわからないものや、大量の箱。この中から必要なものを探すのは骨だ。

「お前は、わしが言う場所から、指定するものを持ってこい」

マジかよ……。

「俺も手伝います」

「いえいえ、全てこれにさせますので」

「しかし……」

「いえ、こればかりは譲れませぬ」

「わかりました」

ちえっ。

せっかく、椎崎さんは手伝うって言ってるのに……。結局、俺が一人でする羽目になるのか。

「ほれ、早急(さっきゅう)に持ってこい」

じいさんは、次々に場所を言ってくる。

言われた俺は、ダッシュでそこに向かって、目的のものを探す。見つけたら、キヨカに渡して、それを椎崎さんが車に載せていく。

なんだか、理不尽なりレーだ。

でも、なにを言っても聞き入れてくれるわけじゃないし、逆らっても無意味だ。ホントに理不尽。虐待じゃないのか、これは。

結局、一時間はそうやっていたが、もう体力の限界だ。広い蔵を上へ下へ、右へ左へ、奥へ手前へ……やっつけられるか。

じいさんはわざとなのか、あえて前回と違う場所を指定してくる。しばらくして、少し前に行った場所を言ってきやがる。これが意地悪じゃなくてなんだろうね。

「はあ、はあ……まだあるのか？」

膝に手を置いて、荒くなった息を整える。

「まだまだあるが……どうでしょう？」

じいさんが椎崎さんに訊く。

「そうですね。とりあえず、このくらいあればなんとかなるかと思います。また、数日したらここに来させてもらいます。その際、しばらくここに泊めていただくかもしれませんが……」

「問題はございません。その際は、神様も来られるのですかな？」

「そうですね。彼らの能力(ちから)についてもあるので、璃織魚さんには来てもらうつもりですが、仕事もあるので……」

「そうですね。お忙しいでしょうからな。そうじゃ、この二人には、自分たちでそちらへ伺う事にしましょう」

「そうですか。それなら、明日、俺と一緒にいきますか。もちろん、そちらの予定が大丈夫ならですけど」

「そんな、滅相もございません。ご同行させていただくなど、もったいない……」

「別にいいですよ。一人でも三人でもたいして変わりませんし。その方が、色々と楽でしょうし。宿泊場所は、こっちで手配しておきます」

「そんな。心歌には私がお金を持たせて、宿に泊めさせますので。これは野宿でも構いません」  
なんだか、俺たちを無視して話が進んでいく。

「そこは、これから頑張ってもらわないといけない二人ですし。そちらがいいようでしたら、明日にでも。場合によっては、こちらへ戻る時間がないかもしれませんので、旅の準備を可能なだけでもしておいてくれますか」

「……わかりました。お願い致します」

じいさんが深々と頭を下げる。

「ほれ、お前たちも」

じいさんに頭を押さえつけられる。

「それでは、明日にまた来ます」

と、椎崎さんは宿があるという栄琉(はる)へ向かった。

残された俺たちは……、

「ほれ、さっさと準備をせい。明日は神様に会う事になるかもしれんのだぞ。それなりの準備をせんかい」

じいさんに尻を叩かれて家に向かう。

部屋に入ると、すぐさま旅行の準備をさせられる。

といっても、俺はここへほとんど荷物なしで来たので、それらしい荷物はな。

「ねえ、どこに行くの？」

「神崎グループ本社ビルじゃよ」

キヨカの質問に、じいさんは満面の笑みで答える。ここまで態度が違うってのはどうなんだろうな。今に始まった事じゃないけど。

「ふうん」

キヨカはとりあえず頷いているようだ。まあ、よくわかってないんだろう。

……って、神崎グループ本社ビル？

ちょっと待てよ。なんだ、それ。

神崎グループつったら、かなりの大企業じゃねえか。日本三大グループのひとつだろ。ほとんどの企業がどこかの傘下って話だろ。経済に詳しくなくても、知ってるような名前じゃねえか。



そんな神崎グループの本社だと？

この椎崎さんって人は、そんな大企業の関係者だったのか。親戚とか……そんな感じか？  
なるほど、あのじいさんが諂うわけだ。

「もしかして、神様ってのは、神崎グループの誰かなのか？」

「なにを言っとるか。神崎グループの会長をされている、神崎璃織魚様こそが、神の能力(ちから)をお持ちになっておられるのじゃ」

「……………」

言葉を失った。

おいおい、俺はただの学生だぞ。そりゃ、就職活動とかも近々あるけど、まさか神崎グループと関わるとは思ってもなかった。そりゃ、傘下の会社はあるだろうけど、本社ってあり得ないだろ。

しかも、会長に会うとか、一生ないと思ってたぞ。つうか、想像すらしてなかった。完全に別世界のもので、まさにテレビの世界って感じだった。

それが、いきなり会うって……人生、なにがあるかわからんな。

まあ、普通じゃない出来事も体験したし、変な能力(ちから)もあるみたいだし。

もう、どうとでもなれって感じだな。

「わかったら、さっさと準備をせんか。きちんとしてお会いするんじゃ」

「じいさんは、どうするんだ？」

「わしは、ここを離れるわけにはいかん。詩稀を守護する事が、わしの役目じゃからな。お会いできるものなら、わしだって神様にお目通りを願いたいものじゃ」

やっぱ本音はそうなのか。

「そういえば、神崎会長って若い女の人なんだよね」

キヨカがぼつりと呟く。

「マジか」

じととした目でじいさんを見る。

もしかして、そういう事なのか？

「莫迦もんがっ！ お前はそういうふしだらな考えしかできんのか。神様に対して、そういう劣情を抱くなど、死罪に値するわ」

必死の形相で言われると、余計に疑わしいんだがな。

「わかったよ」

「そんな余計な事を考えとらんで、準備をせんかい」

怒鳴るだけ怒鳴って、部屋を出ていった。

「なんだか、すごい事になっちゃったね」

そう言いつつ、キヨカはかなり落ち着いてるように見える。

「その割には……」

思わず絶句した。

キヨカは、ずっと同じ服をたたんだり、広げたりを繰り返していた。

おいおい、それはちょっとショック受けすぎじゃないのか？

でも、気持ちはわからんでもない。

俺も少ないながらの荷物をまとめる。

「お前は、これを持って行け」

と、じいさんがあの木刀――風伯を持ってきた。

「持ち出していいのか？」

とりあえず受け取る。

「現在の使用者はお前じゃ。お前が持っているのが一番いい。いつ何時(なんどき)必要になるかわからんしの」

「そういうもんなのか？」

じいさんは、そういうもんじゃと頷く。

「でもさ、銃刀法って大丈夫なのか？ そもそも、こういうのって警察に登録されてたり……」

「そんなもん、しとるわけないじゃろ。そんな事をしてええもんじゃない」

やっぱりか。

「それにな、市中で振り回さんかったら、問題なんぞありゃせんじゃろ」

まあ、そうか。きちんと布かなにかで覆ってたらわからないだろ。そもそも、見た目は木刀だ。それでも職質くらいされそうだけど、それはなんとかなる……というか、なんとかするしかないだろ。

「さすがのお前でも、常識はあるものと信じておる。決して失礼をするでないぞ」

それだけ言って、じいさんは部屋を出ていった。

それ以降、翌朝まで来なかった。

キヨカは、部屋に戻ってスーツケースに着替えなどを詰めていた。旅の準備って言われても、なかなか長期旅行なんてしなかったからな……。

そもそも、俺の荷物はここにはほとんどない。結局、一人暮らしをしている部屋に戻らないといけない。なので、俺は準備というほどのものがない。

そんなこんなで、なんとか準備を終えて就寝した。

翌朝、俺たちは椎崎さんが来るのを待っていた。

つうかさ、朝の四時とかないだろ。そんな時間に来るのは、どうも非常識だろう。

それでも、いつ来ても待たせる事のないようにと、無理矢理起こされた。

欠伸(あくび)をしながら、玄関で座り込んで待つ。さすがに朝は肌寒いので、薄い毛布を羽織る

。隣では、キヨカも同じように毛布にくるまって……寝てやがる。そりゃ、眠いよな。多分、緊張して寝てなかったんだろう。

結局、椎崎さんが来たのは、七時になろうかという頃だった。それでも、早い時間だな。

「おはようございます」

爽やかな笑顔で、椎崎さんが車から降りる。

「おはようございます。本日は、ご面倒をお掛けして申し訳ございません」

じいさんが前に出て挨拶する。

「いえいえ、急に無理を言って……。都合などあったでしょうに、すみません」

「いえいえ、こいつなんぞは、なにもする事がないですから」

じいさんに背中を叩かれる。

「じゃあ、ちょっと電車よりは時間が掛かるから、すぐに出発しようか」

「お願いします」

キヨカが元気に返事をする。

「ほれ、お前も挨拶せんかい」

「よろしくお願いします」

じいさんに言わされた感じがするのが残念なところだ。

「まあ、話は車でできるだろうし。それでは、二人をお預かりします」

「ご迷惑をお掛け致します」

じいさんが深々と頭を下げる。

「じゃあ、二人は車に乗って。それでは、また来させて頂くかと思いますので」

じいさんは、深々と頭を下げたままだ。

椎崎さんは、車に乗り込む。

「それじゃ、行ってきます」

そう言うと、車を発進させる。

車中はオーディオから聴こえてくる音楽だけだった。運転している椎崎さんはもちろん、俺もなにも発さない。キヨカは、車に乗ってすぐに眠ってしまった。

特に考えてもしょうがないし、この先の事なんてなおさらだ。考えれば考えるほど、緊張してきて頭が痛くなる。

その結果、俺はといえば窓の外を眺めているだけだ。

余計な事を考えず、流れていく景色を見る。

さすがに逢稀(あき)近辺は、同じような景色ばかりだ。なにもない。ただ畑があったりする、本当に長閑な風景だ。

それも、栄琉(はる)に近付いてくると一変する。

都会とまではないまでも、逢稀と比べれば大都会だ。それなりにビルだってある。

もちろん人もそれなりに多い。だからといって、朝から人がいるかといえば、それは別問題だ

。逢稀は基本的に老人しかいないので、みんな朝が早い。しかし、街はそうでもないようで、まばらにしか人の姿を見かけない。

そんな見知ったような、それでいて違うような街の表情を眺める。まだ半分眠っている街。これから、徐々に目を覚ましていく。

街を抜けていくと、あまり知らない場所にやってくる。逢稀に来る時は、だいたい電車が多かったので、車での景色は新鮮だ。

「眠っててもいいんだぞ」

不意に前から声がして、それが椎崎さんの声だと気付くのに少し掛かった。

「あ、いえ、大丈夫です」

「まだ先は長いし、昼には適当に起こすから」

「.....ありがとうございます」

にべもなく断るのも悪い気がして、ゆっくりと目を閉じる。

次に目が覚めたら、知らない世界だった.....なんて、それはないだろう。

目を閉じると、思いの外疲れていたのか、あっという間に落ちた。

「起きなさいって」

耳元で叫ばれた声に目を開ける。ああ、耳が痛い。

「なんだよ.....」

不自然な体勢だったのか、体が痛い。

いてて.....と腰をさすりながら起きる。どこだろうと思って車の外を見る。

外には大量の車が停まっている。どこかの駐車場らしい。サービスエリアか。

「やっと起きた」

ぐいっと肩を掴まれて、後ろを向かされる。そこには、キヨカの顔が。

「.....なんだよ」

まだ眠いんだっての。

「トールちゃん、お昼ご飯だって」

お昼ご飯？

ぼんやりとしたまま、運転席を見ると、そこには既に椎崎さんの姿はなかった。

「あれ？ 椎崎さんは……？」

「椎崎さんなら、先に行ったよ。腹が減ったから先に食ってるって。起きたらおいでって言ったよ」

「そうか……」

車のシートに座ったまま眠っていたので、伸びをする。体がぴんと伸びる。ああ、気持ちいい。

そうしていると、確かに腹が減ったかも。朝が早かったからな……。寝てただけだけど。

「わたし、お腹ぺこぺこだから、食べに行ってくるね」

そう言って、車を降りる。

「ちょっと待て、俺も行く」

慌てて俺も降りる。

……て、施錠しなくていいのか？

少し冷静になって、ドアを開けようとする、きちんと施錠されていた。あれ？ どうなったんの？

とにかくキヨカを追う。

「あ、そうだ、言い忘れてた」

ぴたっと立ち止まって振り返る。

なんだ？ 言い忘れ？

「わたしには奢ってくれるらしいけど、トールちゃんは自腹だって」

「……………」

なに、それ。

「えっとね、男に奢るのは俺の主義じゃない、だったかな」

そう言って、キヨカはフードコートへダッシュしていった。

「……………」

なるほど。納得したよ。

俺だって、奢るなら女の子だよな。うん、あの人、かなり人間くさくて好きかも。最初は、神様みたいな人だと言われてたから、かなり気構えてたけど、こうしてると普通の人だよな。

だからって、オーラがないわけじゃない。どことなく、現実にはいない感じがある。

まあ、腹は減ってるから、自腹だろうが関係ないさ。元々そのつもりだし。奢ってくれるなら、それはそれで嬉しいけど。

ぼちぼちと歩いていく。

平日だが、さすがに夏休みシーズン……つっても、社会人ってもう夏休みなのか？ まだ七月だぞ。俺だって、夏休みになったばっかだよな。

ともかく、サービスエリアのフードコートは、結構な混雑だった。

地元のB級グルメを前面に押し出していて、なにやら知らない名前の料理の幟が乱立している。

しかも、いい匂いがそこかしこから。ぐう～と腹の虫が。

中に入ると、なにを食べるか悩んでしまう。

なににしようかな……。

キョロキョロと見回す。

ふと、椎崎さんを見つけた。

結構近くにいたのか。なんだか、おいしそうに焼きそばを食べていた。

あ、旨そう。

というわけで、俺も焼きそばにしよう。

その隣には、キヨカの姿が。

なんか、食事ってよりはおやつじゃないか。ででんとパフェを食べていた。

地元B級グルメらしい焼きそばを買って、椎崎さんがいるテーブルに向かう。

「よお、起きたか」

椎崎さんが焼きそばを口にしたまま顔を上げる。

「はい、すみません、眠ってしまって」

「いいさ、別に運転を代われるわけじゃなし、これからが大変なんだから、今はゆっくり寝てればいい」

そう言って、ずそぞと焼きそばを啜る。

俺も椎崎さんの前に座って、焼きそばを食べる。

「あ、旨い」

高級感には確かにないけど、素朴な感じで旨い。

「なかなかいけるな、これ。やっぱ、B級グルメって侮れないな」

そう言いながら、椎崎さんはずそぞと焼きそばを食べ続ける。

「おいしいよ、おいしい」

キヨカはパフェを食ってる。

「なあ、それは食事なのか？」

「当然だよ。女の子はね……」

「甘いものと、少しのスパイシーなものでできてるんだ。それと、秘密かな」

焼きそばを食べていたはずの椎崎さんからそんな言葉が。

「……なんですか、それ」

俺は目を丸くしていたが、キヨカは目をくりくりさせていた。爛々と輝いている。なにかが琴線に触れたらしい。

「まあ、特に意味はないさ」

そう言って、またずそぞと食べている。

なんなんだ？

「やっぱり、素敵だよな」

キヨカは手を組んで、ぽわわとなっている。なんだ、この恋する乙女みたいなのは。

まあ、どうでもいいや。

俺も焼きそばを食べる。

やっぱ旨いや。

結局、もそもそと無言で食べる。

目の前でパフェを食われると、なんだか甘ったるくて、それだけで満腹感があった。

***(C)2012 STUDIO SAIX All Rights Reserved.***

サービスエリアを出発して、しばらく単調な道を走る。

「旅についてだったか」

不意に椎崎さんが口を開いた。

「はい。それに、昨日のあの変な穴みたいな……」

「ああ『時の口』か。それについても話しておいた方が、これから楽かな」

そうだな……と呟いて、椎崎さんが考え込む。

「正直なところ、君たちがどんな旅をしなければならないのか、俺たちみたいな旅になるのかわからない。だけど、普通じゃないのは確かだ」

「普通じゃない……ですか」

まあ、そうだろうな。あの蟲(ベステート)に関してなら、普通じゃないのが逆に普通だよな。

「俺は、今回の蟲(ベステート)がどんなものなのか、この目で見てないんだが……その刀で闘うんだろ？」

「はい」

ぎゅっと風伯を握る。

「蟲(ベステート)は……この前、俺が闘ったのは、五〇センチくらいの、本当に虫みたいなぴょんぴょん跳ねるヤツと、自分よりもかなり大きい——三メートルくらいはある、三つの団子に脚が生えたようなヤツでした」

「なるほど……その大きさなら、かなり怖いな」

「……俺は、ただやられるだけで、結局はキヨカと蜘蛛(アラネーオ)に助けられたんです」

「そういえば、この前もそんな風に聞いたな」

「はい」

あの時の事を思い出すと、今でも情けない。

「君の質問に答える前に悪いが、どんな風だったのか、聞かせてもらってもいいかい？」

「……構いません」

ぽつりぽつりと、順に話していく。

ばあちゃんの家で地図を見つけた事。

地図を解読して、白西山に登った事。

そして、そこで蟲(ベステート)を解放してしまった事。

それを封印するために、門番(ポーディスト)を探した事。

その門番(ポーディスト)の力を借りて、なんとか蟲(ベステート)を二匹だけ封印できた事。

それらを順に話していく。

俺が話している間、椎崎さんは楽しそうに相槌を打ちながら、聞いてくれていた。

「なるほどな……。そいつは大変だったな」

大変だった。うん、確かにそうだ。

「だが、これからがもっと大変かもしれないぞ」



そうだろうな……。確か、俺たちが封印を解いてしまった蟲(ベステート)は全部で一六。あと一四いるって事だ。

これをそれだけ繰り返すのかと思うと、それだけで大変だ。

「大変そうですね……」

なんとなく呟くと、運転席からきつい言葉が返ってきた。

「甘いな。全然わかってない」

どういう事だ？ 確かに俺はわかってないかもしれないけど。

「確かに、今回みたいなのがあと一四回あるってのは大変だけど、相手も今回みたいに封印できるとは限らない。しかも、今回はホームグラウンドだったから、スムーズだったのかもしれない。加えて、相手が待っていてくれたのかわからないが……もっとも、あいつらがそんなはずないが、対処する準備ができた。だけど、これからは違う。時間も世界も違う場所で、相手と同じようだとは限らない。仮に特殊な力があつた場合、それに対抗する手段を持っていないと封印できない。門番(ポーディスト)の蜘蛛(アラネーオ)だって、いつも万全とは限らない。一四回もあれば、なにか不測の事態があるかもしれない。それらを考えると、とてもじゃないが、苦勞の連続としか考えられない」

言われればもっともだ。だけど、違う世界と違って、正直想像できない。そもそも、現実味がない。

「そこでだ。参考にはならないかもしれないが、俺たちの話だ。俺たちは世界を消滅させるものを倒して、さらには神の能力者を救った」

いきなり結論だ。しかも、かなり突飛でファンタジーな内容だ。

「そんな昔話だ」

そう前置きして、椎崎さんが語りだした。

それは、今の奥さんの亜依さんとの出会い。一度旅を終えて、再び別のパートナーとの旅。そして、再び亜依さんとの旅を経て、神の能力者を救い、世界を救った話。

俺が蟲(ベステート)とか蜘蛛(アラネーオ)を見ていなければ、絶対に信じなかった内容だ。

さらには、ここではなく、全ての世界を管理している世界を救った話や、特殊な能力(ちから)を持った人たちとの戦いまで、現実とは思えない話ばかりを、延々と語られた。

その中でも、奥さんの話が一番多かった気がする。

そんな話を聞いていると、いつの間にか日はとっぴりと暮れていた。

「そろそろ晩飯かな」

椎崎さんはそう呟くと、サービスエリアに車を停める。

「晩ご飯だね」

気が付くと、キヨカが嬉しそうに笑みを浮かべていた。つうか、こいつずっと寝てたのか？

「どしたの？」

不思議そうにキヨカを見ていたからだろうか、向こうから訊いてきた。

「お前さ、ずっと寝てたのか？」

「……ううん、ずっと聴いてたよ」

「聴いてたって……起きてたのか」

「そだよ。すごい話だったね。さっきの話って、本当の事なんですよ」

キヨカが運転席の椎崎さんに訊く。

「ああ、そうだ。俺は嘔吐きを仕事にしてるが、さっきの話は実際にあった事だ。脚色はない」  
嘔吐きを仕事？

「あの……仕事が嘔吐きって、なんですか？」

物怖じしないのが、キヨカのいいところだと思う。こうして、俺が訊けないような事を、疑問に思ったら訊いてくれる。感謝。

「ああ、言ってなかったか。つうか、知らないのか……。それはそれでショックだな」

なんだか、ハンドルにもたれ掛かるようにして、落ち込んでいるようだ。

知らないって、有名人だったのか？ 芸能人って感じじゃないし……。

「俺は作家なんだよ。でっち上げの文章を書いて生活してんの。ちょっとは、小説も書いてるんだけどな……」

「椎崎さんって、小説家さんだったんだ」

キヨカは目をキラキラさせている。

そうか、作家だったんだ。そりゃ、知られてないってのは、ショックかも。でも、顔は知らなくて当然でしょ。……って、名前か。ペンネームじゃなくて、本名で書いてるんだったら、やっぱり名乗った時にリアクションがないのは、淋しいんだろうな。

一瞬、まさかとは思っても、なにかしらのリアクションはするだろうし、しないって事は知らないって事だよな。

にしても、作家か……。そういう職業の人に初めて会った。

「小説以外にも、色々書いてるけどな」

「どんなのですか？」

「最近、美少女ゲームのシナリオも書いてるし、この前は絵本の文章も書いたっけか。とにかく、真面目くさった文章以外なら、だいたい書いてるな。フィクションに限るが」

ノンフィクションは書かない、と。

まあ仮に、さっき聴いた昔話なんかを書いても、まさかノンフィクションだとは思われないだろうけど。誰だって、あんなのはフィクションだと思うだろ。

「そうなんだ……。今度、本屋さんで見つけたら読んでみますね」

「立ち読みは勘弁な」

「てへへ、やっぱり……ですね」

すごい。キヨカの行動を先読みした。キヨカは読むって言ったけど、買うとは言ってないからな。こいつ、こういう誤魔化しをたまにするんだよな。

いきなりこうされると、椎崎さんから言質を取るのは難しいだろうに、お為ごかしなんて無理そうだな。

「さて、俺の仕事なんぞ、この際どうでもいいんだ。さあ、腹も減ったし、飯にしよう。ずっと座ってるのも疲れるだろ」

椎崎さんが先に車を降りる。

「はい、ありがとうございます」

俺も車を降りる。

確かに、ずっと座っていると、それだけなのに……いや、そうだからこそ疲れる。体を思い切り伸ばすと、一気にリフレッシュできる。

「う～ん、疲れたよ。それに、お腹空いちゃった」

「寝てただけなのにか」

「トールちゃんだって、座ってただけでしょ」

「そうだけだな」

確かに、座ってただけだけど、腹は減っている。

「さてと、ここにはなにか美味しいご当地メニューはあるかな……と」

ずっと運転していて、疲れているはずなのに、椎崎さんは元気に建物に向かって歩き出す。

この人、かなりタフだな。作家って、ずっと座ってるだけだから、体力が落ちたりするものじゃないのか？ やっぱり、昔に……今もっぽいけど、こういう事件に関わってきたからなのかな？

「夜はなににしようかな……」

「デザートじゃなくて、ちゃんにご飯を食べろって」

「わかってるよ。お昼だって、トールちゃんが来る前に、ちゃんと別のを食べてたもん」

「ああ、それマジだぞ。彼女、昼はパフェの前に、ご当地バーガーを食べてたからな」

「……本当ですか」

「本当だ」

マジかよ。確かに少し遅れて行ったけど、それでもそんなに時間は経ってなかったぞ。それなのに、既にそんなものを食べてたなんて……。

「夜は丼ものもいいかな……」

「おっ、それも旨そうだな」

と、なにやら二人で楽しく会話をしている。いや、別に羨ましいわけじゃない。ヤキモチでもない。これはツンデレとかそういうんじゃないで、マジで。

夜だったのに、サービスエリアって混雑してるものなんだな。どこかに行ってきて、その帰りにここで夕食ってのもあるんだろうけどさ。

「おっと」

ぼんやりしてると、おいてけぼりだ。小走りで追いかける。

それにしても、どこもだいたい同じ感じだよな、サービスエリアって。

中に入ると、いい匂いが充満している。

色々とメニューがあって、ついつい迷ってしまう。

「ここは……ここだけってのはないのか？」

椎崎さんは全体を見回して、なにかを探している。

「う～ん、すっごく平凡ですね」

キヨカもキヨロキヨロとしている。

どうやら、ご当地限定商品を探しているようだ。

うどんやそばなどの麺類や、丼もの、フランクフルトやフライドポテトといったものがジャンル別にあるが、どれもこれも普通だった。

「ここで提案だ。この先、この規模のサービスエリアは、結構走らないとない。小さい所だと、ここの二の舞だろう。時間を掛けて別のサービスエリアに賭けるか、ここで妥協するか。どちらか多数決で決めたいと思う」

椎崎さんが真剣な顔で言うものだから、なにかと思えばそんな事か。

「即決だ。いくぞ。ここで妥協する」

拳手は一人。俺だ。

「よし、行くぞ」

椎崎さんは、問いかけとほぼ同時に踵を返していた。

それは、キヨカも同じだった。

.....なんだよ。決めてたのか？ 質問した意味は？

いや、そうじゃないんだ。二人は確信していたんだ。意見が一致していると。だから、俺がどっちを選択しようが、二人が一致している以上、決定されている。

なんだこの出来レースは。

しょうがない。どのみち多数決の結果だ。

もう、どこでもいいと思うんだけどな。まあ、我慢できないほど腹が減ってるわけでもなし、時間が掛かってもいいんだけど。

とりあえず、ここではトイレだけすませて、再び車に戻り、次なるサービスエリアを目指して走り出した。

――結果的には、賭に負けた。

椎崎さんとキヨカは、地元の発展に尽力しないとは嘆かわしいと文句を言いながら、それぞれ天丼とカツ丼を食べていた。

俺は親子丼をもぐもぐ食べた。結構、旨かった。

心の歌を奏でて 一序章一 ②

<http://p.booklog.jp/book/48882>

著者：芳田尚哉

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/studiosaix/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/48882>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/48882>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.